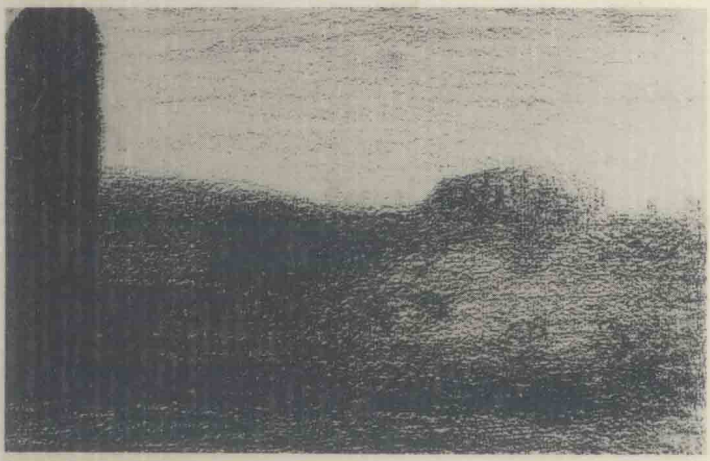
夜はまだあけぬか

梅棹忠夫



夜はまだあけぬか

梅棹忠夫

講談社

夜はまだあけぬか

定価——一三〇〇円（本体価格一二六二円）

一九八九年一二月一〇日第一刷発行　一九九〇年二月二二日第二刷発行

著者——梅棹忠夫

© Tadao Umesao 1989 Printed in Japan

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—一二—二　郵便番号一一二—〇一　電話〇三—九四五—一一一一

印刷所——凸版印刷株式会社　**製本所**——株式会社大進堂

ISBN4-06-204696-2

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします
なお、この本についてのお問い合わせは、学芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

まえがき

一九八六年の三月、突然に両眼の視力をうしなってから、三年以上の年月がながれた。現在においてもわたしの目はよくなってはいない。ものの形はぼんやりとわかるが、色はまったくない。よみかきはもちろんできない。すべてはうすくらがりの世界である。

学問をこころざして、研究で身をたてているものにとって、これはもちろんおおきな痛手であった。たまたまわたしは老年の域に達して、仕事のしめくくりをつけなければならない時期にさしかかっていた。しかし目がみえないのでは、どうしようもない。なにか方法はないものかと、文字どおり暗中を模索(もさく)した。その奇妙な体験の記録がこの本となった。

目はみえなくても、いろいろやってみると道はひらけてくるものである。わたしはなんとか仕事をつづけることができるようになった。視力はいっこうに回復せず、みえないままであるが、その意味では病状は安定している。さいわいなことにわたしの精神は比較的バランスをうしなうこともなく、病状とともにいまは安定している。また、目以外はしごく健康である。以前にもまして、気力の充実を感じている。

わたしの視力喪失については、たくさんのかたがたにご心配をおかけした。入院中も退

院後も多数のかたがたのお見舞をうけた。ほんとうにありがたいこととおもっている。この本はみなさまに対するわたしの近況報告書でもある。

目の不自由なわたしが、とにもかくにも毎日公務を遂行できるのは、国立民族学博物館や財団法人千里文化財団のわが同僚諸君、および関係する各機関のみなさまのあたたかいご協力のおかげである。ふかく感謝している。

この本の内容は一九八六年九月から八九年九月までのあいだに、同人雑誌『千里眼』に掲載したものである。執筆時期については巻末の「初出一覧」にしるしてある。文中、たくさんの人たちに登場をねがったが、その肩がきは執筆当時のもので、現在はかわっている場合もあるが、そのままにしておいた。ご了承いただきたい。

原稿執筆はすべて口述筆記によるもので、筆記には近藤敦子さんの手をわずらわした。しるして謝意を表する。

この奇妙な体験記の出版については、講談社の専務取締役加藤勝久氏、学芸図書第一出版部長鷲尾賢也氏、ほか講談社のみなさまのご高配をいただいた。あつく御礼もうしあげる。

一九八九年九月

梅棹忠夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夜はまだあけぬか　7
退院まで　37
みえないなりの知的生産　79
薄明をいきる　137
音楽にいどむ　175
本づくり　209
初出一覧　246

夜はまだあけぬか

装幀＝山岸義明

夜はまだあけぬか

うすぐらい部屋

一九八六年三月一二日の朝、わたしはひどいせきで目がさめた。せき薬をのもうとおきだして、居間へいった。薬がきいて、ようやくおちつき、窓のそとをみると、まだ夜があけていない。わたしのすむマンションのまえには、おなじマンションのD-6棟があり、その建物のシルエットが夜空にくろくみえる。すこしはやすぎるかとおもったが、このままおきることにした。部屋のなかもうすぐらいので、食卓のうえの電灯をつけた。そのあかりはまるいお椀形のシェードがかぶせてあり、スイッチをひねると、食卓のうえがパーッとあかるくなる。ところが、その日はまったくあかるくならない。電灯がついているのかいないのか、わからないようなよわよわしい光だった。

「おかしいな、この電気くらいな」

というと、妻は、

「ちゃんとついているし、そとはとっくにあかるいのに」

という。時間をきけば、七時すぎだ。わたしはそれまでなんの疑念もなく夜あけまえとおもっていた。わたしははじめておかしいと気がついた。

なにかわたしの目に異変がおこったにちがいない。これはすぐ専門家の診察をうけなければならないなとおもった。とりあえず館長室秘書の三原喜久子さんの自宅に電話をいれた。そこで三原秘書はわたしの勤務先の国立民族学博物館の庶務係長に連絡するとともに、国立循環器病センターの曲直部壽夫総長に秘書をとおして相談した。いっぽう庶務係長のほうは大阪大学医学部附属病院に相談したという。さきに曲直部先生からの助言が三原秘書にはいった。目そのものの病気とおもわれるので、眼科のある阪大病院へいきなさいという指示であった。

循環器病センターに相談をいれたのは、日ごろわたしの糖尿病のことをしっている三原秘書の判断ではないかとおもわれた。糖尿病の悪化による眼底の毛細血管の破裂の可能性があるからである。わたしの妻もそうかんがえたようだった。

わたしの自己診断では、これは毛細血管などまるで関係がないとおもわれた。なぜならわたしの目の異常は両目に同時にきている。毛細血管の破裂なら、片目にべつべつにくる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はずである。眼底出血をすれば、ある部分か全体がまっくろになるはずである。うっすらとみえるというようなことは、かんがえられなかった。またこれは、網膜の問題ではないとおもった。わたしは以前、中心性網膜炎をわずらった経験があるので、網膜の異常には、なんとなく勘がある。銀色にひかるとか、像がいびつになったりする。その経験から、これは網膜の問題でもないとはじめからわかっていた。問題は視神経だ。わたしは視神経をやられたとおもった。

入院

さっそく館のほうで手配してくれて、すぐに阪大病院にいくことになった。阪大では館の公用車でもいいし、救急車でもいいから、いそいできてほしいということだった。一〇時ごろ、館の車がむかえにきて阪大病院へむかった。

車の窓からそとをながめると、どこまでも夜景色である。淀川の鉄橋のアーチが夜空にくっきりとシルエットでみえる。景色はすべてシルエットでしかみえない。灰色と黒の世界である。

阪大病院の正面玄関について、建物のなかにはいると、なにもみえなかった。まっくらである。とても自分であるいていけるような状態ではなかった。車いすにのせられて、外

来の検査をつぎつぎとうけ、その結果すぐに入院ということになった。わたしは、そのまま東三階の眼科病棟の病室におくりこまれたのである。

まさかほんとうに入院するとはおもってもいなかった。急にみえなくなったのだから、急にみえるようになるはずだという気があった。検査をうけ、せいぜい数日入院したらかたがつくだろうとおもっていた。しかしそれは、あまりにも楽観的すぎた。

この病院は完全看護体制になっているので、ふつうはつきそいをみとめていないのだが、わたしのように、にわかに視力をうしなったものについては特例がみとめられていた。妻がおなじ部屋につきそいとして寝おきすることになった。つきそいのための貸ぶとん屋もあり、昼間はふとんを箱にしまうと、箱はそのまま長いすになった。

検査所をまわるのに、看護婦のおす車いすで廊下をゆききした。まっくらな廊下をゆくとそよ風がここちよく、わたしののる車いすは、快適なスピードでスムーズにすべってゆく。わたしはまるでタイムトンネルのなかみたいだとおもった。そのときわたしは漆黒の闇のなかにいた。すでに視力はほとんどなくなっていた。その漆黒の闇のなかに、しろい積乱雲のようなものがもくもくとたちのぼっている。たぶん壁かなにかだったろうとおもうが、そのときはまるで、しろい妖怪かなにかのようにみえた。それがつぎからつぎへとあらわれ、ワーッといまにもわたしの頭上にたおれかかってきそうだった。わたしは魑魅

魍魎どもがわたしをとりかこんでいるようにおもった。その漆黒の闇にあらわれる妖怪たちのなかを、そよ風にふかれながらすべっていく。じつにふしぎで幻想的な世界であった。

漆黒の闇のなかで

視覚がなくなり、そとからの光の刺激がきえた。リセプターとしての目の機能がなくなると同時に、こんどは映像の逆投射がはじまった。

最初にあらわれたのは、宇宙の、太陽系に浮遊する小惑星だった。無人探査機ボイジャーが土星に接近した際に、土星周辺部の小惑星のすがたをとらえたことがあった。いびつなかっこうをした石ころみたいなものや、ぶつぶつのあばただらけの巨大な岩塊がうつしだされた。つくば博でそのような立体的な映像をだしていた館があったが、まさしくそれとおなじだった。宇宙のかなたからわたしをめがけて、それら浮遊物が回転しながらとんでくる。目前まで巨大な岩塊がつぎつぎとせまってきた。

つづいて幾何学的な色彩の映像があらわれた。ほそく、じつにうつくしい金線が十数本、平行にはしっていた。横、ななめ、上とさまざまな角度から視野いっぱいにあらわれてくる。その先端はややまがっていたり、まくれあがったりしている。それがスーッとながれてきて、一瞬のうちにきえると、またべつの方向からながれてくる。たいへんにきれいな

ものであったが、なぜそのようなものがでてきたのか、心あたりはまったくない。

赤、黄、緑がかった青の三色のテープがびっしりとならんでてきたこともあった。ひところ日本でも食堂や美容院の入口に、幅二センチほどのビニール製ののれんがさがっているのをよくみかけたものだが、それに似ていた。あるいは、博物館に展示されているタジックやウズベックの矢がすり模様の織物にもにていた。矢がすり模様ではないが、たてに平行した三色のしま模様である。そのあいだをさきほどの金線がながれ、じつに鮮麗な色彩をおりなした。

生物学的な映像もあらわれた。ウニなど棘皮動物の殻の表面から刺をすべてとりさると、ぶつぶつの骨片がのこる。ぎっしりとならぶ骨片が、さきのたてじま模様とコラージュになってでてきた。骨片はグレーで、色はない。ちょうど『千里眼』同人の木村光佑氏の得意とするコラージュの版画の世界であったが、人間の顔や鳥といった具象的なものはでてこなかった。

以前タバコのウィルスの顕微鏡写真をみたことがあった。もくもくとちいさいキノコがかさなりあったような、たいへんふしぎなものであったが、そういうのがコラージュにわりこんでくることもあった。

これらの映像がどうしてあらわれるのか、わたしには、まったくわからない。外界から

の光は全部きえてしまっていた。すると内界の、脳からの逆投射がはじまっているのだ。それをどこでみているのだろうか。網膜なのか、視神経なのか。逆投射による像はくりかえしくりかえし何日もつづいた。そしてある日、忽然ときえうせた。それ以後二どとあらわれなかった。そしてひじょうにしずかな暗闇の世界がおとずれたのである。

球後視神経炎

わたしは眼科病棟東三階の一室に入院したが、目の異常のほかに糖尿病があるために、眼科と第二内科の共同観察の患者ということになった。眼科が主力であるけれども、内科も関与するということらしい。

毛細血管や網膜ではなく、神経をやられたという自己診断は、やはりあたっていた。初期の診断では眼球のうしろの神経、いわゆる球後視神経が炎症をおこしている。炎症をおこす原因になったのはウィルスによる感染であろうという診断だった。

それにしてもそんなウィルスをどこでひろってきたのであろうか。視力喪失の一〇日まえまで、わたしは中国旅行をしていた。体調はたいへんよかったが、旅行の最後になって、ひどいかぜにやられた。のどと鼻をやられ、せきがはげしくでた。日本にかえってからも、せきはおさまらず、鼻はつまりっぱなしであった。そして四日ほどまえから大量の目やに

がでた。視力喪失の朝も洗面所で目やにをあらいおとすのに時間がかかった。やはり中国産のかぜのウィルスが鼻から目に転移したのであろうか。

その前夜、夜の会合からかえってくると、妻がテレビをみていたので、そのとなりにすわった。テレビの画面にいくつも色の欠落した部分があるようにおもった。

「おかしいな、このテレビは。見にくいテレビだ」

とわたしがいうと、妻は、

「テレビはきれいにうつっているのに。あなたがよっぱらっているからでしょう」

といった。わたしはそのままねてしまった。いまからおもうと、視力喪失はまったくの突然ではなく、こういう前兆はいくらかはあったのである。

ウィルスによる球後視神経炎に対応する処置が開始された。そういう場合に主としてとられる療法はステロイド注射である。ステロイドというのは一種の副腎皮質ホルモンで、連用するといろいろな副作用がおこってくる。

そのひとつに糖尿病への悪影響がある。わたしは十数年まえからかるい糖尿病であったが、それほどひどいものではないとおもっていた。インシュリン注射もせず、なんの療養もしていなかった。ところがステロイド注射をすると、たちまち糖尿病が悪化するという。糖尿病の悪化をふせぎながら、ステロイド療法をすすめなければならない。わたしが眼科

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com